

千 葉 県 八 千 代 市

# 池 の 台 遺 跡

—— 都市計画道路3・3・7号線  
造成工事に先行する緊急調査 ——

1 9 8 6 ・ 3

八 千 代 市 教 育 委 員 会  
八 千 代 市 都 市 部 都 市 計 画 課

## 例 言

1. 本書は千葉県八千代市萱田2241番1号外の発掘調査の概要をまとめたものである。
2. 本遺跡の発掘調査は準備を昭和60年4月より進め、同年5月27日より着手し、同年8月3日まで実施した。
3. 本書の執筆は秋山利光が担当した。
4. 本遺跡の出土遺物及記録図面等は八千代市教育委員会が所掌し、八千代市文化財整理室に現在保管している。
5. 調査にあたって地元の方々の御協力、御助言を賜わり、記して謝辞としたい。
6. 調査組織については以下のとおりである。

調査主体 八千代市教育委員会

大熊章一（八千代市教育委員会教育長）

事務局 秋山幸夫（八千代市都市部都市計画課長）

篠田一郎（八千代市教育委員会社会教育課長）

板橋 実（八千代市都市部都市計画課街路係長）

小笠原和也（八千代市教育委員会社会教育課文化係長 60年10月30日まで）

菊島一利（八千代市教育委員会社会教育課文化係長 60年11月1日より）

続山靖春（八千代市都市部都市計画課主事）

小出忠行（八千代市都市部都市計画課主事）

石神ひとみ（八千代市都市部都市計画課主事）

木原善和（八千代市教育委員会社会教育課主事）

平山りえ子（八千代市教育委員会社会教育課主事）

調査担当者 秋山利光（八千代市教育委員会社会教育課主事）

調査補助員 入江寛、吉野崇則、青木春樹

調査参加者 内山陽子、小林健一、小林ヨネ、秋山正道、秋山和子、板倉春枝、吉川マス、立石みね子、吉川志代、鈴木清、立石春枝、村越美津子、高橋道子、吉橋とよ、鈴木時子

整理参加者 洲上妙子、鈴木孝子、佐治節江、大坪智子、勝又寿子、植田正子

# 目 次

例言

目次

第I章 調査の概要と経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の立地	1
3. 周辺遺跡と歴史的環境	2
4. 調査の方法と経過	4
5. 土層	6
第II章 遺構と遺物	9
1. 第1号住居址	9
2. 第2号住居址	14
3. 第1号溝状遺構	19
4. 第2号溝状遺構	19
第III章 グリッド出土遺物	22
第IV章 まとめ	24

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡 (1/30,000)	3
第2図 調査区域と周辺地形 (1/5000)	5
第3図 調査区域全測図 (1/375)	7
第4図 土層図 (1/60)	8
第5図 第1号住居址実測図 (1/60)	10
第6図 第1号住居址出土状況 (1/60)	10
第7図 第1号住居址カマド実測図 (1/30)	11
第8図 第1号住居址出土遺物 (1/3) 1	11
第9図 第1号住居址出土遺物 (1/3) 2	13
第10図 第2号住居址実測図 (1/60)	15
第11図 第2号住居址遺物出土状況 (1/60)	15
第12図 第2号住居址カマド実測図 (1/30)	16

第13図	第2号住居址出土遺物(1/3) 1	16
第14図	第2号住居址出土遺物(1/3) 2	18
第15図	第1号溝状遺構実測図(1/150)	20
第16図	第2号溝状遺構実測図(1/150)	21
第17図	グリッド出土遺物	23

図版目次

図版 1	遺跡近景(北側)、遺跡近景(南側)	28
図版 2	発掘風景、実測風景	29
図版 3	第1号住居址、第1号住居址土層	30
図版 4	第1号住居址遺物出土状況	31
図版 5	第1号住居址遺物(1)	32
図版 6	第1号住居址遺物(2)、第1号住居址カマド	33
図版 7	第2号住居址、第2号住居址土層	34
図版 8	第2号住居址遺物出土状況	35
図版 9	第2号住居址カマド、第2号住居址遺物(1)	36
図版10	第2号住居址遺物(2)、第1号溝状遺物発掘風景	37
図版11	第1号溝状遺構、第1号溝状遺構土層	38
図版12	第2号溝状遺構、グリッド出土遺物	39

# 第 I 章 調査の概要と経過

## 1. 調査に至る経過

都市計画道路 3・3・7号線は麦丸から大和田へ貫ける道路として計画されている。麦丸から萱田町までは萱田特定土地区画整理事業として、道路部分を包み、千葉県文化財センターにより発掘調査が実施されていた。そのため区画整理事業区域から南へ3・4・1号線までの約100mの区間が同市都市計画課の事業計画にのぼり、昭和53年埋蔵文化財の所在の有無の問い合わせが同市教育委員会及び千葉県教育委員会に提出された。県文化課及び八千代市社会教育課では、現地踏査及び周辺区域の発掘調査の結果等より、遺跡の所在を回答するに至った。しかし同区域の土地買収等の問題のため、調査計画の進展をみずに経過した。昭和59年4月都市計画課より、道路工事着工のめどがたったため、調査体制等について問い合わせがあったが、市教育委員会としては十分な体制を作ることが不可能であると判断されていた。しかし、継続的に協議が行われ、路線の変更も不可能であると判断され、記録保存やむを得ないという結論に達し、市教育委員会直営で発掘調査を行い、道路工事の付帯工事として国庫補助を得て実施することとなった。同市教育委員会では調査体制の整備に努めたが、十分な体制がとれないまま昭和60年5月27日より発掘調査を着手することになった。

## 2. 遺跡の立地（第1、2図）

調査区域は千葉県八千代市萱田2241番地に所在する。

八千代市は下総台地西部に位置しており、市中央を貫流し印旛沼へ流れ込む新川とそれに合流する桑納（かんのう）川によって、大きく3つの台地に区分される。そして、これらの台地はさらに小支谷により樹枝状に侵蝕されている。水系は本来印旛沼水系に属していたが、現在では花見川の開削により、一部は人工的に東京湾水系に変化している。

このような地理的状況のもと、調査区域は新川の西岸沿いにある市営球場あたりより南西、大和田中学校方向に入り込む谷津に東面する。新川より500m程奥まったところに位置している。調査区域はさらに小さな谷津により南北に分断されており、北側は財団法人千葉県文化財センターにより調査が実施された白幡前遺跡の南端に位置する。また南側は昭和54年、昭和59年に八千代市遺跡調査会により調査が行われた池の台遺跡の北端に位置している。

調査区域の標高は23m前後であり、谷津からの比高差は8m程である。

### 3. 周辺遺跡と歴史的環境（第1図）

八千代市内の遺跡調査は近年増加の傾向にあるものの、多くは開発とともに歴史的資料が記録保存することなく失なわれており、また失なわれつつけている。しかし一方で、昭和20年代に行われた調査（註1）以降、宅地開発とともに調査例が増加している。これらの調査例及び市内の分布調査をもとに市内の歴史的環境を概観することで、本調査の理解の一助としたい。

市内には多く遺跡が所在しており、昭和57年度の分布調査（註2）では264ヶ所の遺跡が知られる。さらにその後も新たな遺跡が確認され増加している。時期は先土器時代から江戸時代まで多種にわたっている。特に先土器時代から平安時代までをしてみる。

先土器時代では萱田遺跡群（183他）より多くのナイフ形石器等の出土がみられる。また村上遺跡群（205他）、萱田町川崎山遺跡（241）、池の台遺跡（240）、向山遺跡（173）などで、ポイント、ナイフ形石器等のわずかな出土例はあるものの、まだ該期の姿を明らかにするには、さらに出土例の増加をまたなければならぬだろう。

縄文時代は住居址を伴う発掘例が乏しく、調査例では桑納新田遺跡（59）、より前期を主体として晩期までの出土が知られ、阿蘇中学校東側遺跡（119）、向山遺跡では中期の包蔵地である。また中期の遺跡として、真木野向山遺跡（23）では3軒の住居址を伴う遺跡であるが詳細は現在整理中である。後期の土器を包蔵する遺跡としては麦丸遺跡（151）が知られる。

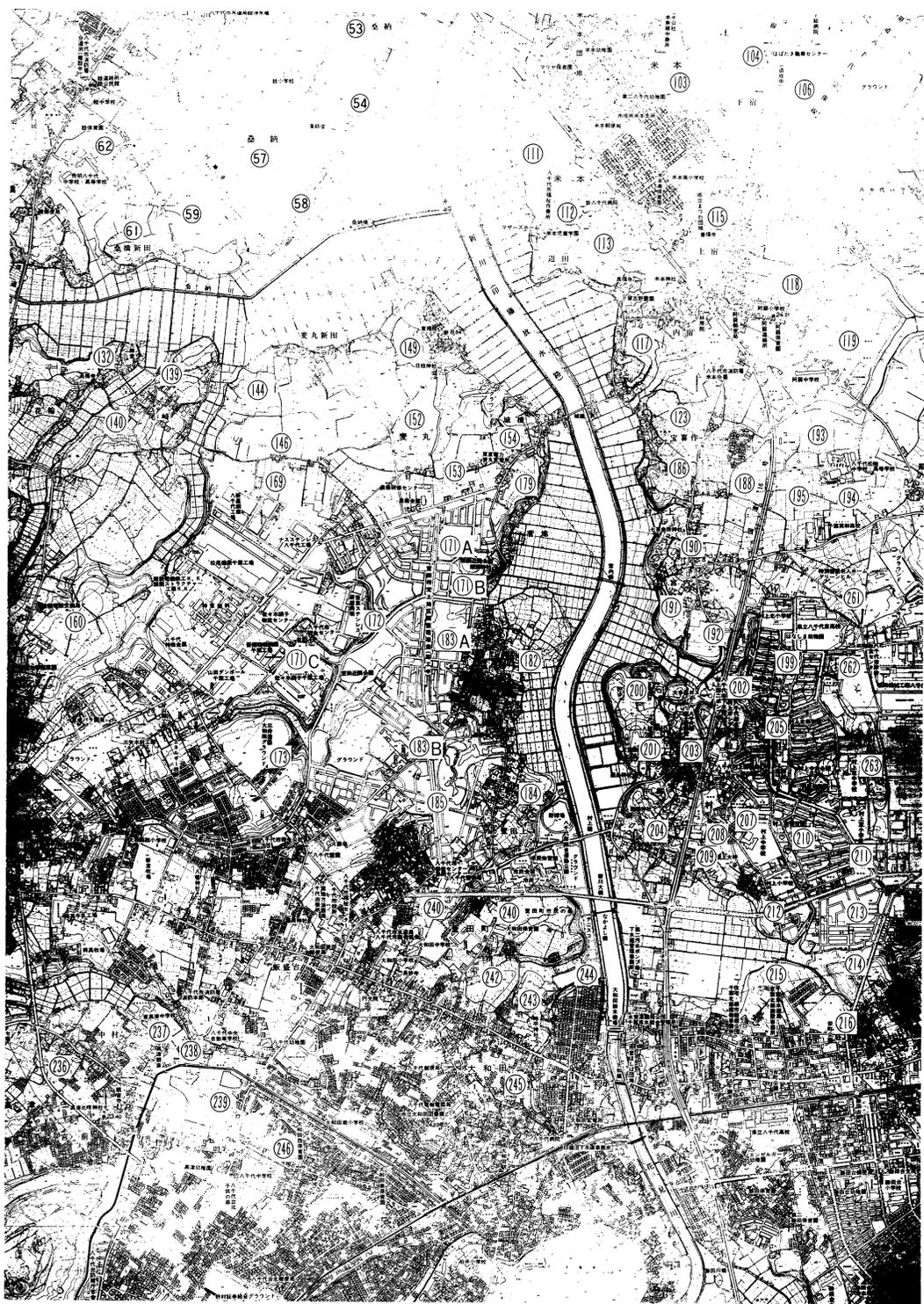
弥生時代は村上遺跡群（205、206、他）、萱田遺跡群、阿蘇中学校東側遺跡、道地遺跡（18）、おおびた遺跡（86）、青柳台遺跡（111）、など多くの遺跡の調査が行われており、後期の集落としての姿が明らかにされつつある。また桑納新田遺跡では方形周溝墓の周溝覆土より鉄剣が出土している。古墳時代の集落の調査例は多く、萱田遺跡群、萱田町川崎山遺跡、小板橋遺跡（245）、村上遺跡群、高津新山遺跡（239）、桑納遺跡（57）などがあげられる。古墳で現在確認されているものでは村上塚群（211、212）、七百余所神社古墳（190）、根の上神社古墳（209）、桑納古墳群（58）、等があげられる。

平安時代の集落の調査例は特に多く、また人面墨書（註3）など特筆される土器の出土もみられる。萱田遺跡群、村上遺跡、高津新山遺跡、池の台遺跡などの調査が実施されている。各遺跡の報告が順次出されており、今後新たな研究により多くのことが明らかになるであろう。

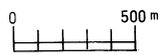
註1 玉口時雄他「印旛沼出土の剝舟」古代3 1951年 早稲田大学考古学会

註2 「八千代の遺跡」 1983年 八千代市教育委員会

註3 「八千代市萱田、白幡前遺跡発掘調査現地説明会資料」 1982年 財団法人千葉県文化財センター



第1図 周辺遺跡 (1/30,000)



#### 4. 調査の方法と経過

本遺跡の発掘調査は昭和60年5月27日より実施し、同年8月3日に終了した。調査対象面積は2,526㎡であり、調査が実施された面積は675㎡である。区域内より住居址2軒、溝状遺構2条を検出したため、遺構内部の調査が行われた。

遺構の調査は、埋没状況の観察のため土手を残している。特に住居址は十文字に土手を残し、詳細な観察を心がけて行われた。遺構内の遺物は基本的に20分の1で出土位置及び高さを記録しながら取り上げ、出土状況の特異なもの、あるいは完形土器については10分の1で実測している。カマドの調査は火床、煙道を通るライン及び、それに直交するラインで土層の観察を行っている。

##### 日誌抄

5月27日 現況は平坦地であるが調査区中央部に小さな谷津が入り込んでいることが周辺の地形から判断される。そのため、谷の中心部と思われるところに重機によりトレンチを掘る。現況地表面より2mのところ旧地表面が表われる。盛土であり、危険なためすぐに埋めもどす。

5月28日 白幡前側の平坦部より盛土の撤去を開始する。盛土の下は比較的良好に遺存している。しかし、攪乱はところどころにみられる。

5月30日 重機は池の台側の盛土の撤去をはじめ。現況の状況よりも攪乱はひどく、ところどころに碎石が埋められている。また器材の点検を行い、調査地に運搬し、テントの設営を行う。境界杭を基点にグリッドの設定を開始。

5月31日 白幡前側より表土剥ぎ作業を開始、表土中に土師器、縄文土器（早期）片を出土。

6月1日 H-6グリッドより溝状の遺構を確認。確認面上より土師器の出土量が多い。

6月7日 I-4グリッドより落ち込み（1住）を確認、土師器の出土量が多い。

6月11日 I-4、5区より検出された落ち込みは住居址と判断される。4m大の方形の住居址である。一部が盛土撤去の行われていない区域に延びている。覆土上面より高台部が出土。

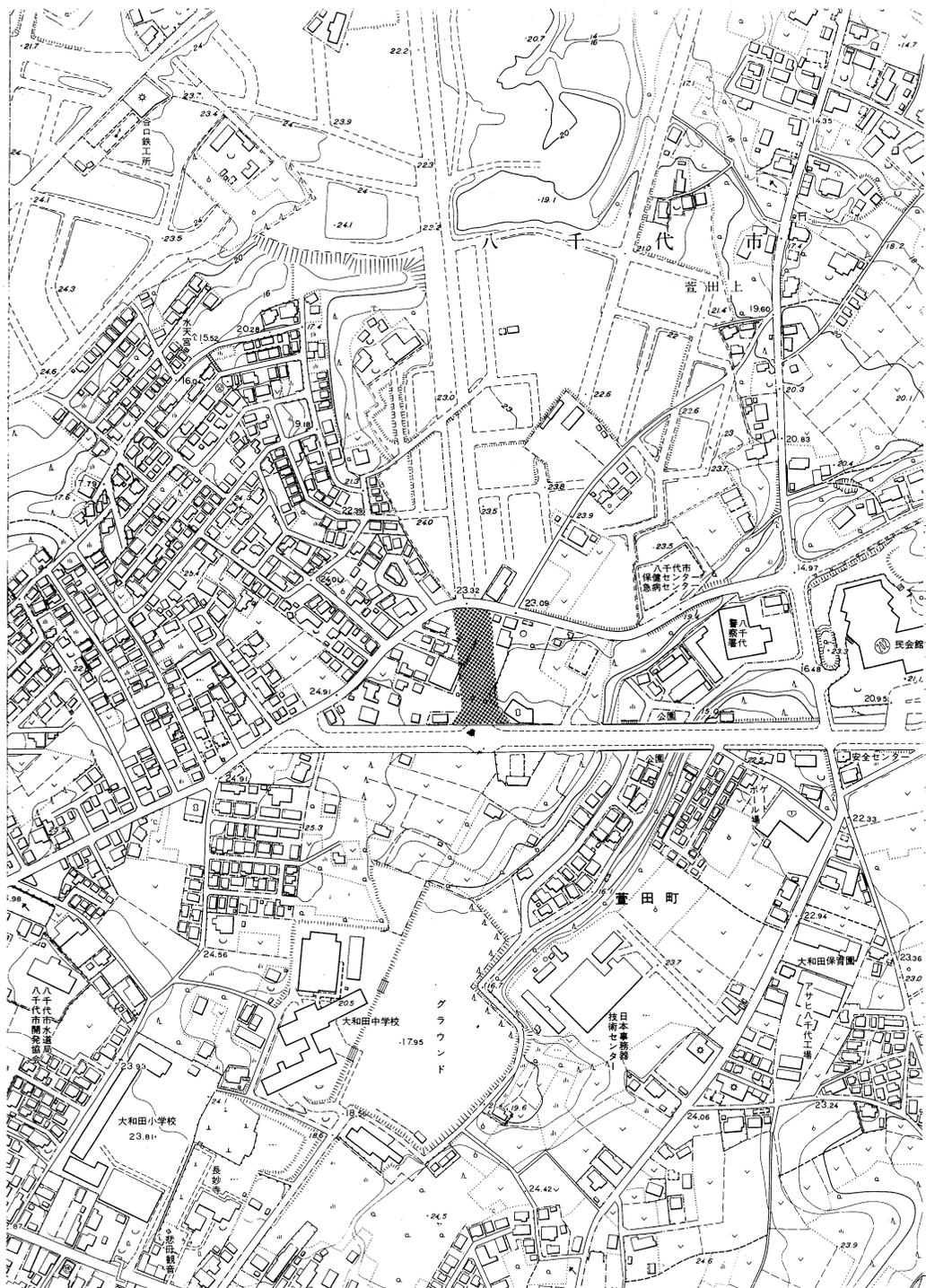
6月12日 池の台側の表土剥ぎを行う。攪乱がはげしく、各グリッドにロームの検出される部分が少なく、遺物の出土も少ない。

6月29日 白幡前側の溝状遺構及び1住の周辺グリッドの拡張作業を続行。

7月12日 1住及び溝状遺構の調査を行う。溝状遺構はセクションを3本設定する。溝の底に浅いピット状の落ち込みがある。

7月16日 1住の調査中、西側境界付近より白色粘土を検出、カマドの付設が想定される。

7月25日 1住の平面実測及び写真撮影を行う。F-5グリッドに落ち込みを確認するが、ガラなどが多量に残っているため撤去作業に時間を費やす。住居址（2住）と確認されたため調査を開始。溝状遺構の完掘状況の写真撮影。I-16、17区において溝状遺構を検出、調査を始める。



第2図 調査区域と周辺地形 (1/5000)



7月27日 1住カマド調査。甕等の大破片が煙道付近より出土。2号住居址は出土遺物が比較的少なく、若干の完形土器が出土する。

7月30日 1住は柱穴らしきものが検出されないため床面の撤去作業を行う。自然な凹凸が確認されるが支柱穴と判断されるものはない。2住は完掘し、写真撮影を行う。

8月3日 2住のカマドは上部にガラ等の攪乱のため明瞭には検出されないが完掘する。

## 5. 土層

調査区域の中央に入り込む谷津は、旧表面上に2 m以上の盛土があり、現況で平坦地となっている。南北両平坦部には若干の盛土があり、一部表土の削平も行われている。両側ともにガラ等を埋めた痕跡が多くあり、遺構の検出を困難にしている。自然堆積層もかなり填圧されており、本来の形状ではないが4層に分層される。池の台側は攪乱がはげしく明瞭ではないがロームまでに表土層のみが確認されている。

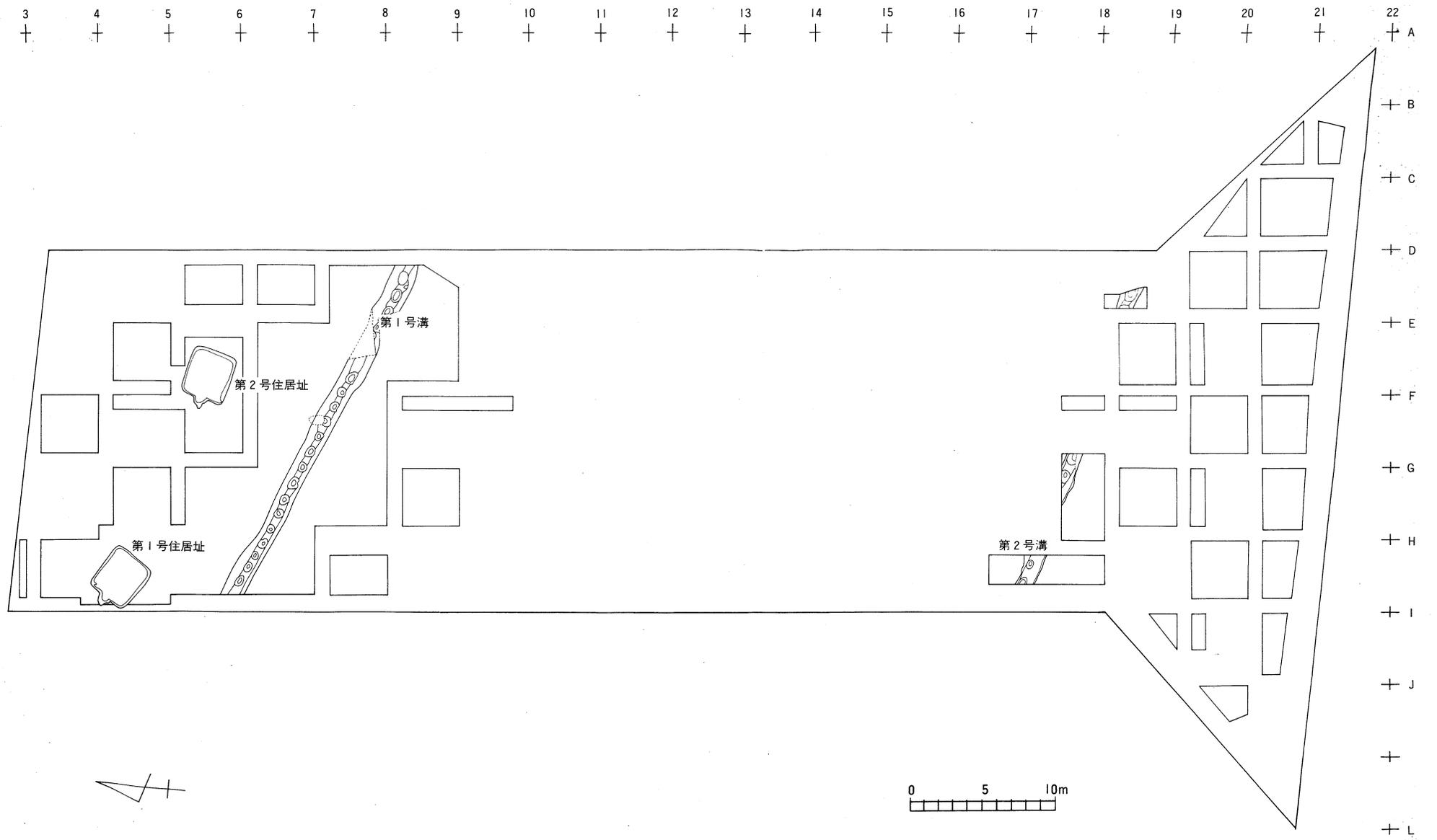
第1層 暗褐色土層 ローム粒子の混入がみられ、焼土粒子、炭化粒子も含まれる。しまりの良い土層。遺跡全体を覆う土層であるが、堆積上不自然な点もある。

第2層 黒色土層 褐色土が全体的に混入しており、ローム粒子も含む。

第3層 褐色土層 暗褐色土の混入がみられ、やや粘性がある。漸移層

第4層 黒色土層 暗褐色土及び褐色土の混入がみられる。2層よりもしまりが良く硬い土層。

第5層 ソフトローム層 一部では填圧により硬くしまっている部分もみられる。



第3図 調査区域全測図 (1/375)



## 第II章 遺構と遺物

調査区域の中央に比較的浅い谷津が入り込み、調査区を2分している。区域内は多くの攪乱を受けており、遺構等の検出が困難であると思われた。南側の台地（池の台側）は予想どおり、地表面より深いところで検出された2号溝のみにとどまった。しかし北側の台地（白幡前側）には幸いにも2軒の住居址と2号溝と同形状の1号溝を検出することができた。

### 1. 第1号住居址（第5、7図、図版3）

本住居址はI-4、5グリッドより検出され、調査区の西側の境界ぎりぎりに位置している。盛土撤去後の旧表土下約20cmのところより確認されている。攪乱はほとんど受けていないが、若干の傾斜地より検出されているため、当初明瞭な形状は判断できなかった。

住居址の形状は、各隅にやや丸みをもつが、主軸方向にわずかに長い長方形である。主軸方向で3 m50cm、主軸に直交する方向で3 m10cmを計る。主軸はN-67°-W。

壁溝は最高値で55cmと深くほぼ垂直に掘り込まれていることがわかる。床面の状態は暗褐色土等を混入するロームより形成されているが、特に硬く踏みかためられた状況ではなく、やや軟弱である。床面撤去後の観察では焼土粒子、炭化粒子の若干の混入もみられる。周溝は壁直下に掘り込まれカマド周辺を除き一周する。巾は15~20cm、深さ10cm前後である。暗褐色土が主体を占め、ローム粒子を多量に混入する。炭化材も若干混入している。

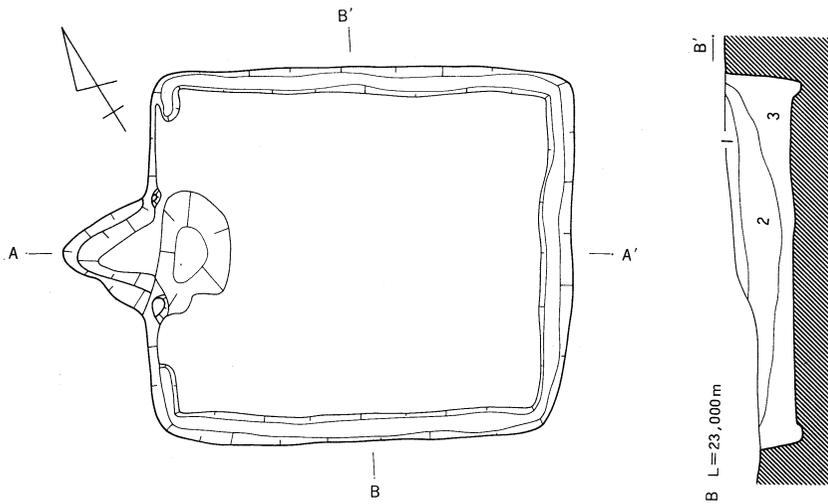
柱穴は完掘後、床面の撤去作業を行なったが、検出することはできなかった。

カマドは北西壁の中央に付設されており、天井部、袖部等の遺存は良好ではなく、わずか袖の一部のみが検出されている。火床は壁直下に掘り込み、長軸1 m、短軸50cmの長楕円形で深さ9 cmを計る。煙道はほぼ床面の高さで50cm程壁を掘り込み、ゆるやかに傾斜させて立ち上がる。約90cmの長さである。袖は煙道の掘り込みの両側にわずかに確認されたのみである。灰白色粘土を主体に構築されているが、砂等を混入している。カマド内部には焼土の遺存があまりみられない。

### 遺物（第6、8、9図、図版4~6）

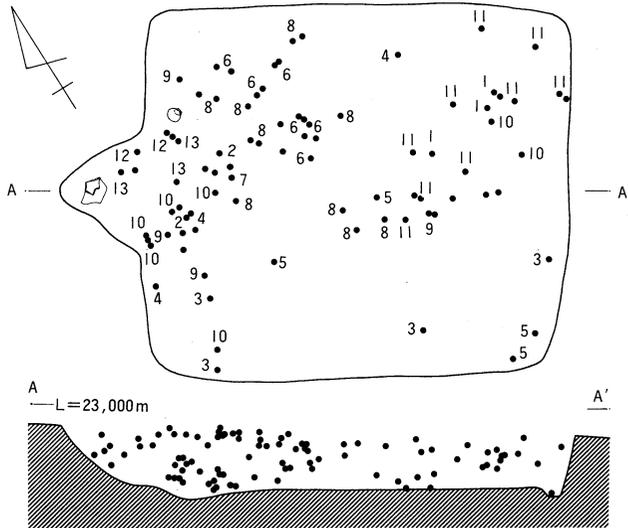
住居址内の出土遺物は400点を越える。出土状況は住居内ほぼ全域から出土しているが、特にカマド周辺に集中する傾向がみとめられ、また、カマド内部よりの出土も多い。床面直上よりの出土もみられるが全体的には、2層、3層中の出土が多い。完形土器の出土は坏などの小形のものに限られる。復元された土器も比較的少ないが、特に図化可能なものを中心に以下説明する。

1は土師器の坏であり、カマド北側の床面直上よりほぼ完形で出土している。器形は底部より

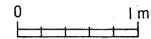


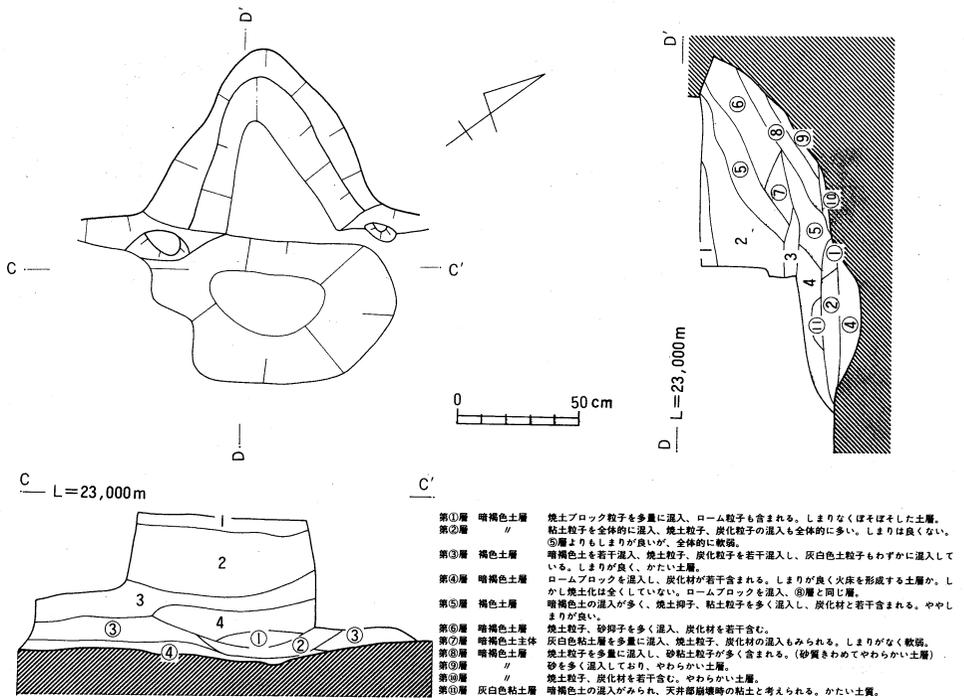
- 1層 黒褐色土層 褐色土の混入が全体的に多い。焼土粒子を含み、しまりの良い土層。
- 2層 黒褐色土層 褐色土の混入はみられるが、1層ほど多くはない。暗褐色土の混入も若干あり、焼土粒子全体的に含む。ローム小ブロック若干含む。
- 3層 褐色土層 全体的に暗褐色土の混入がみられる。

第5図 第1号住居址実測図 (1/60)

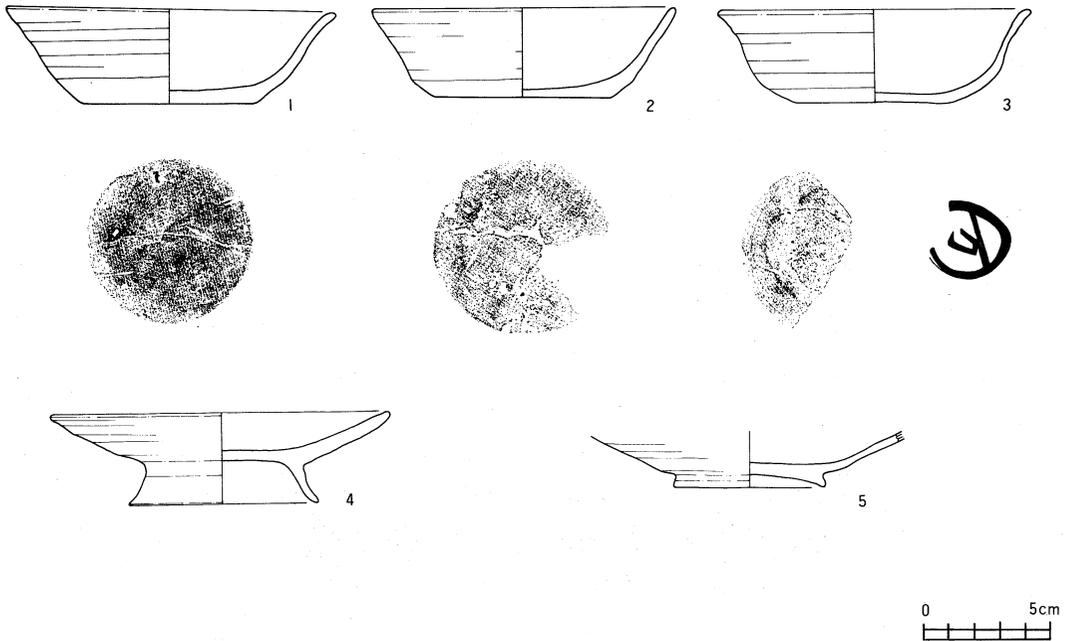


第6図 第1号住居址出土状況図 (1/60)





第7図 第1号住居址カマド実測図 (1/30)



第8図 第1号住居址出土遺物 (1/3) 1

大きく開き、口唇部でさらに外反している。底部は切り離し後、全面回転へら削り、体部下端まで及ぶ。

2は土師器の坏であり、カマド周辺の3層中よりの出土である。器形は底部よりゆるやかに立ち上がり口唇部に至る。底部は切り離し後手持へら削りにより整形され、また体部下端も同様に手持へら削りにより一周している。内面全面に磨きによる調整が施されており、黒色。

3は土師器の坏であり、住居址全体の床面より出土。遺存状況は不良であり、1/3程である。器形はやや内彎気味に立ち上がり、口唇部で大きく外反する。底部は回転糸切り後、周縁を回転へら削り、体部下端も同様に整形される。体部中央に判読不能であるが墨書がみられる。

4は土師器の高台付皿であり、カマド周辺の2層および住居址外から出土している。体部は直線的に大きく開く、器厚は厚い。高台部は貼り付けられ、器厚を薄く高く作られ、先端で大きく開く。皿部内面には縦横に部分的に磨きによる調整が施される。

5は土師器の高台付皿であり、住居址南隅の床面及び西側床面より出土している。底部の回転糸切り後、底部を高台に成形する。体部は大きく開く。口唇部は接合しないが、口唇部でさらに外反するようである。皿部内面には全面、縦横に磨き調整。

6は土師器の甕であり、住居址北側一帯の2層中よりの出土である。器形は胴部より緩やかに内彎し、頸部で直立気味に立ち上がる。口縁で外反し口唇部でやや直立する。胴部は縦位のへら削り、頸部、口縁部は内外ともにナデによる整形。

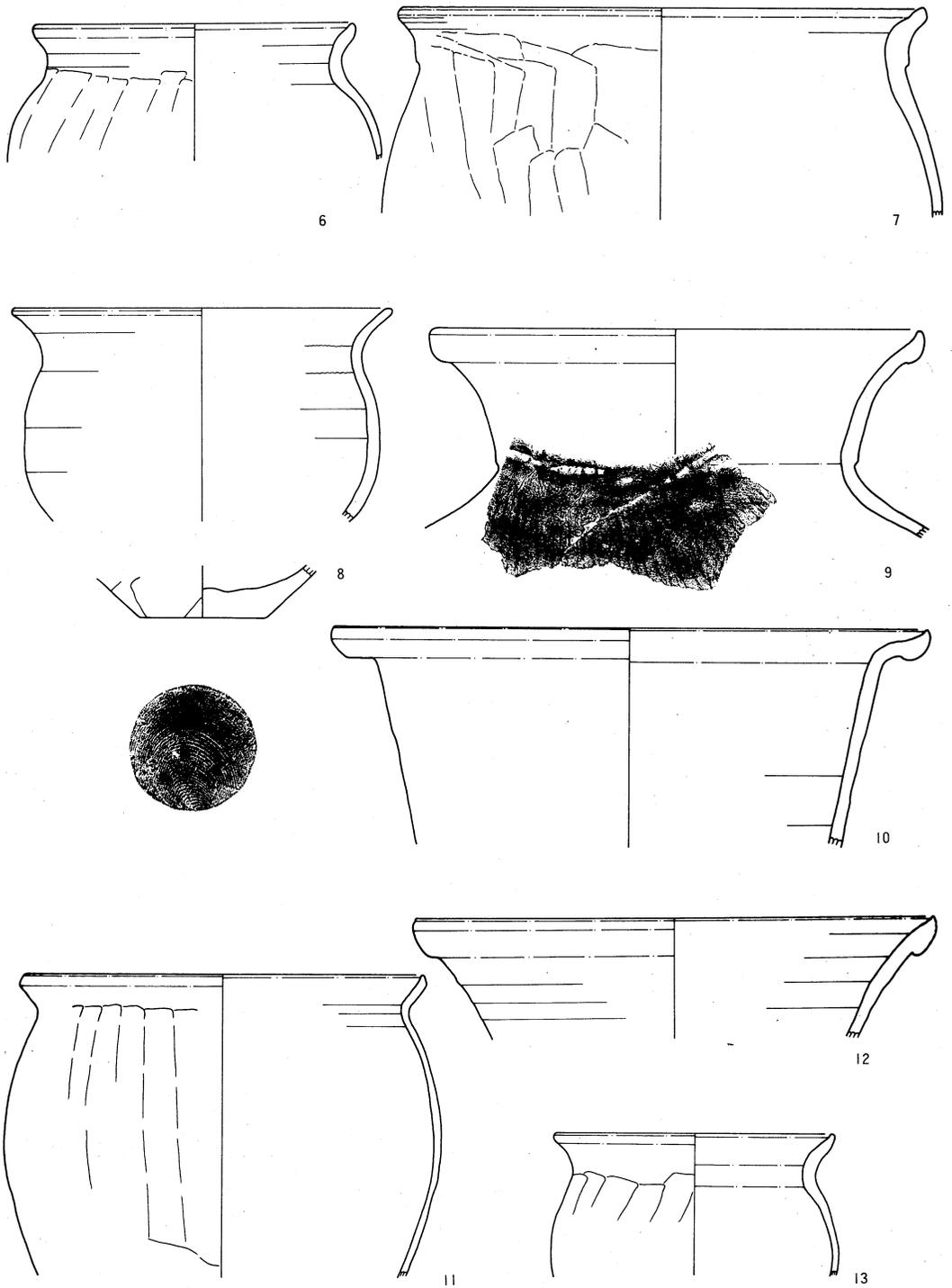
7は土師器の甕であり、カマドの火床の南側、床面直上より出土している。器形は緩やかに内彎する胴部より、器厚の厚い頸部が直立し、口縁で外反し、口唇部でまた直立する。胴部は縦位のへら削り、器厚調整される。口縁部は内外ともにナデによる整形が施される。

8は土師器の甕であり、住居址中央から北隅一帯の2、3層中よりの出土である。器形は平底より直線的に大きく開き、胴部中位に最大径を持ち、ゆるやかに内彎する。頸部より直線的に大きく開いて口縁部を成す。底部に回転糸切り痕を残す。また底部付近に斜方向のへら削り。

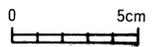
9は須恵器の壺であり、カマドの両側の1層あるいは2層上面よりの出土。2住にも同一個体がみられる。頸部は緩やかに外反し、口縁部で折り返す。口唇部でやや直立気味に立ち上がる。胴部外面はタタキによる整形、頸部及び口縁部はナデ整形。

10は土師器の甑であり、カマドの火床上の2層中及び南東壁側の2層中より出土する。器形は直線的に外傾する胴部より、屈曲し口縁で折り返し、口唇部でわずかに直立する。胴部外面はタタキにより整形されるが、器面がもろく破損がはげしいため拓本が取れない。

11は土師器の甕であり、住居址南東側一帯、3層中よりの出土である。器形は、最大径を胴部上位にもち、口縁部は大きく開く、口唇部でやや直立する。口縁部は内外ともナデ、胴部は縦方向のへら削りより整形される。胴部下位には横のへら削りもわずかにみられる。



第9图 第1号住居址出土遗物 (1/3) 2



12は土師器の甕の口縁部であり、カマド上3層中の出土である。器形はやや外反気味に開き、折り返し、口唇部でやや直立して立ち上がる。内外ともにナデにより整形される。

13は土師器の甕であり、カマド内部より出土する。胴部はゆるやかに内彎して立ち上がり、頸部で直立し、口縁部は外反する。口唇部でわずかに直立。頸部及び口縁部は肉厚であるが、胴部は縦位のヘラ削りにより器厚調整される。

## 2. 第2号住居址（第10図・図版7）

本住居址は確認時点で検出されておらず、グリッド拡張時に、ガラ等の廃棄物の下より確認された。F-5グリッドに位置している。カマド部分と東隅に大きく攪乱を受けており、住居址としての判断が困難であった。

住居址の形状は、一部に攪乱を受けてはいるものの、隅にやや丸みをもち、若干主軸方向に長い長方形を呈する。主軸方向で3 m40cm、主軸と直交する方向で3 m10cmを計る。主軸はN-86.5°-W。

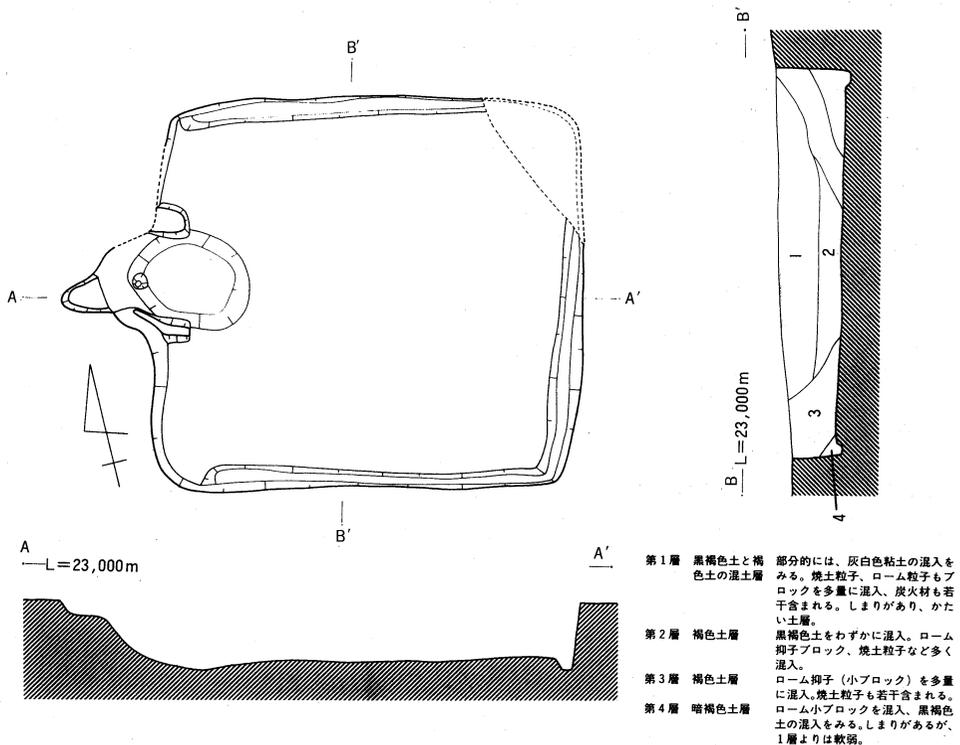
壁高はローム面が若干傾斜しているため北側で55cmの最高値を計る。ほぼ垂直に掘り込まれている。カマドが付設される北西壁面にはカマドから西隅まで灰白色粘土が壁面を補強するように厚さ数cm程貼り付けられている。攪乱の直下でもあり、詳細は不明である。床面はロームにより形成されているが、中央部分から北隅にかけて踏みかためられた状況で検出されている。柱穴等のピットは全く検出されていない。

周溝はカマドの付設される北西壁を除いて「コ」の字形に周る。巾は約10cm、深さは平均5cm程である。覆土は褐色土を主体とし、ローム粒子を多く混入している。

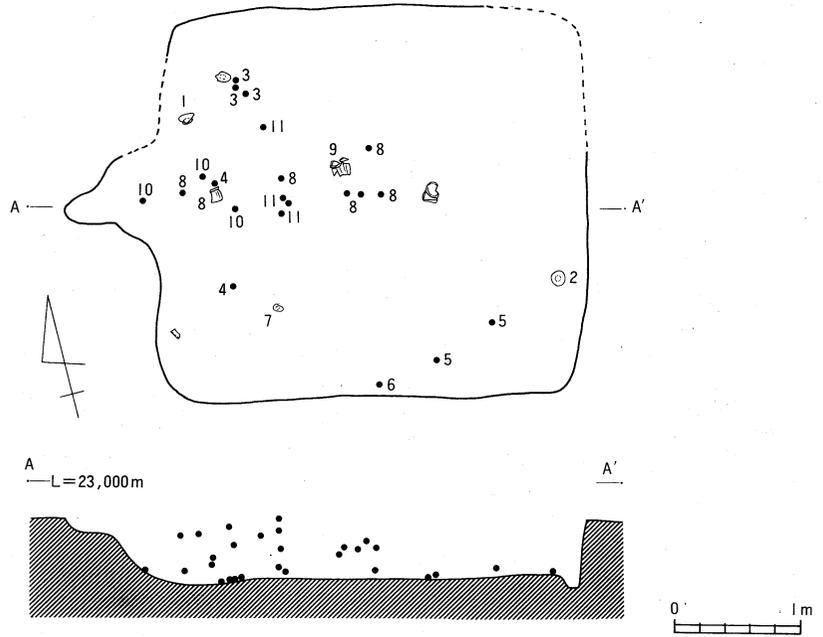
カマドは北西壁のほぼ中央に付設されている。確認面から大きく攪乱を受けているが、遺存状況は比較的良好であり、袖の一部を検出している。火床は壁に一部を掘り込んだ状況で設けられており、長軸方向で95cm、短軸方向で80cmの楕円形を呈している。長軸は住居址の主軸の方向とほぼ同一である。深さは5cm程である。火床の先端部に径10cm程のピットを有する。煙道は火床先端部より比較的急な傾斜で立ち上がり、20cm程で段をつけ、水平に35cm程のびる。全長は火床先端部より55cmを計る。煙道部の壁面にも白色粘土を貼り付けている。袖の構築は灰白色粘土を主体としており、若干暗褐色土、砂粒子等の混入もみられ、硬く築きかためられている。両方の袖ともに、褐色土を土台にしている。

### 遺物（第11、13、14図・図版8～10）

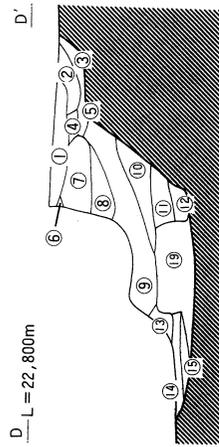
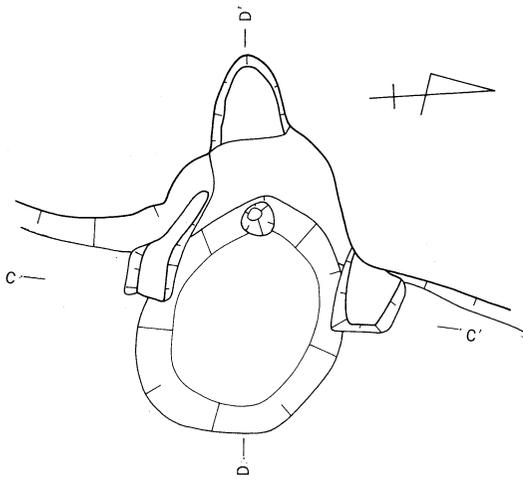
住居址内の出土遺物は90点程であるが、比較的完形の状況での出土率が高い。完形の状態で出土したものは小形の坏が多い。遺物の出土位置は住居址全域に分散し、特に特徴を持たない。出



第10図 第2号住居址実測図 (1/60)

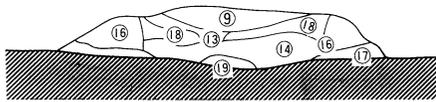


第11図 第2号住居址遺物出土状況 (1/60)

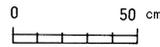


C L=22,800m

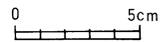
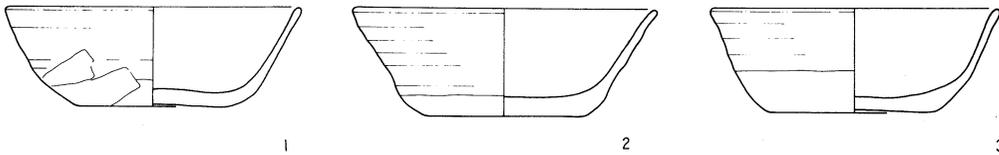
C'



- 第①層 暗褐色土層 ローム粒子を全体的に混入、しまり良く非常にかたい土層。
- 第②層 灰白色粘土層 暗褐色土の混入が多い、ローム粒子を全体的に混接、焼土粒子をわずかに含む。
- 第③層 暗褐色土層 ロームの混入が多い、しまりの良い土層。
- 第④層 暗褐色土層 ローム粒子、粘土粒子、炭化材を混入、しまりが良い。
- 第⑤層 暗褐色土層 粘土粒子を全体的に混入し、炭化材を若干混入する。④層よりも暗い。
- 第⑥層 暗褐色土層 粘土粒子の混入が多い、ローム粒子を全体的に混入し、しまりが良い。
- 第⑦層 灰白色粘土層 暗褐色土の混入をみるが、しまりが良く天井を形成する。
- 第⑧層 暗褐色土層 灰白色粘土を多量に混入し、焼土粒子、炭化材を若干含む。しまり良い土層。
- 第⑨層 暗褐色土層 褐色土、ローム粒子を全体的に混入しており、焼土粒子、炭化材が含まれる。
- 第⑩層 暗褐色土層 焼土粒子、炭化材を全体的に多量に混入、全体的に軟弱⑧層よりもやわらかく暗い土層。
- 第⑪層 暗褐色土層 焼土を多量に混入、⑩層とほぼ同じ。
- 第⑫層 暗褐色土層 ロームを混入、全体的にやわらかい。
- 第⑬層 褐色土層 灰白色粘土粒子を混入、焼土粒も含まれている。しまりが良い。
- 第⑭層 暗褐色土層 焼土粒子、炭化材、粘土を若干混入している。
- 第⑮層 褐色土層 焼土粒子を混入、しまり良く硬い土層。
- 第⑯層 灰白色粘土層 硬く、しまりの良い土層。袖を形成する土層である。
- 第⑰層 褐色土層 暗褐色土を混入するが硬くしまりが良い土層である。
- 第⑱層 灰白色粘土層 暗褐色土を混入、しまりが若干悪く袖ではない。焼土粒子を全体に混入、天井の落下したものが。
- 第⑲層 粘土層 暗褐色土の混入があり、比較的やわらかい。



第12図 第2号住居址カマド実測図 (1/30)



第13図 第2号住居址出土遺物 (1/3) 1

土層位は床面のものも多いが、上層からの出土も若干みられる。図化土器はカマド周辺のものが多くみられる。

1は土師器の坏であり、カマド北側の床面直上よりの出土である。ほぼ完形の状態で出土している。器形は底部より直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。底部は回転糸切り後、手持ちへら削り、体部下端にも同様に整形される。

2は土師器の坏であり、住居址南東壁側の床面直上より出土。ほぼ完形の状態で出土。器形は底部よりやや外反気味に立ち上がり、口縁部で大きく開く。底部は切り離した後、回転へら削り、体部下端も同様である。内外面ともにナデ整形。

3は土師器の坏であり、カマド内火床の南東側の直上よりまとめて出土する。器形は底部より内彎気味に立ち上がり、口縁部ではほぼ直立し、口唇部でやや外反する。底部中央に回転糸切り痕が残り、周縁を回転へら削り、体部下端も同様に整形される。

4は土師器の坏の体部であり、カマド上層よりの出土である。器形は底部よりゆるやかに内彎して立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。わずかに残る底部はへら削りによる整形がみられ、体部下端にも手持ちへら削りによる整形がみられる。

5は土師器の坏の底部であり、住居址南西壁中央部より出土している。器形は底部より大きく開いて立ち上がる。底部は切り離した後、全面手持ちへら削りにより整形され、体部下端にも同様に手持ちへら削りがわずかにみられる。内面黒色、全面に磨きによる調整。

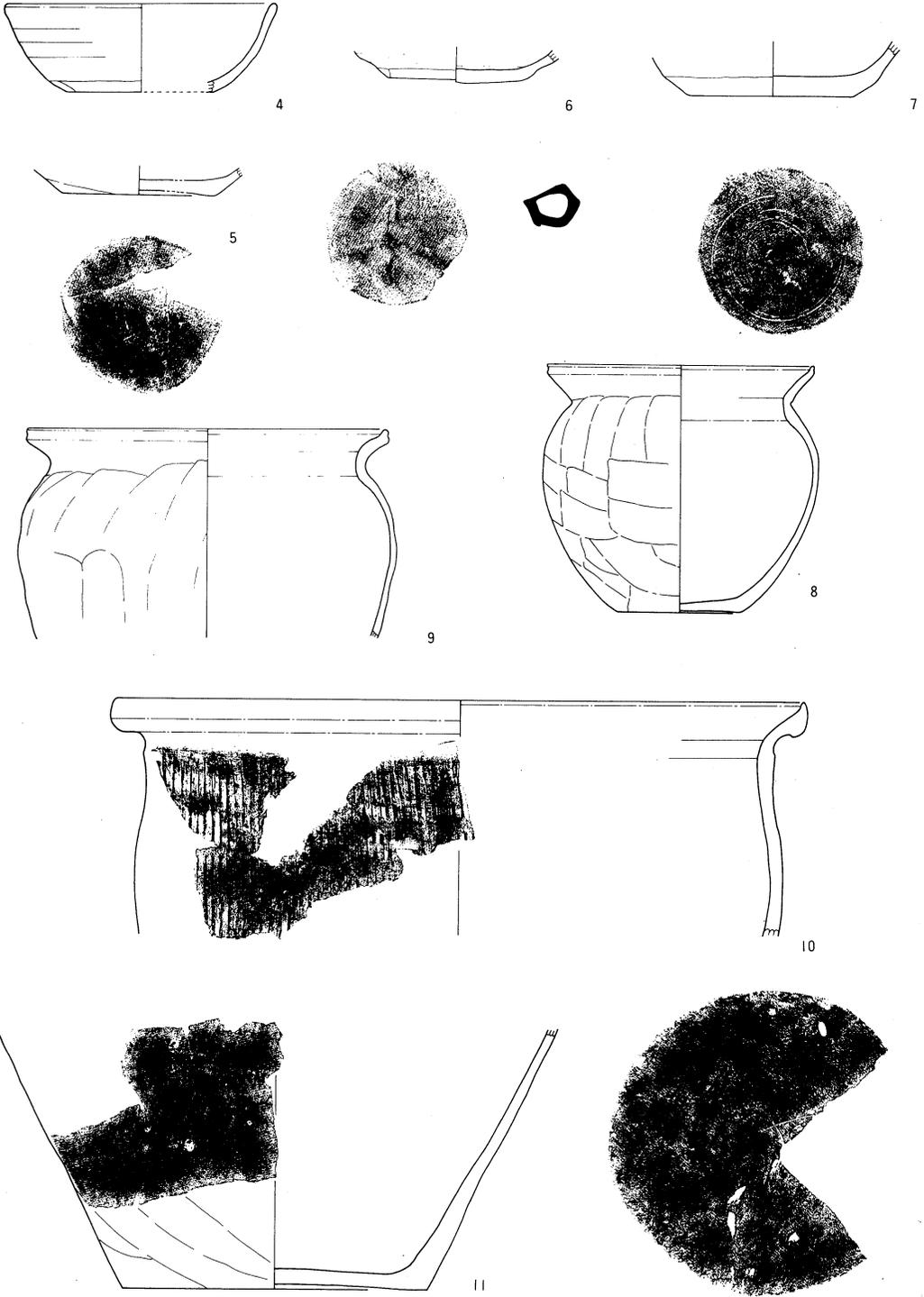
6は土師器の坏底部であり、住居址南西壁中央、床面直上より出土している。器形は底部より大きく開いて立ち上がる。底部は手持ちへら削りにより整形されるがゆがみがはげしい。体部下端にも同様に整形される。体部下端に墨書がみられるが判読不能。

7は土師器の坏底部である。住居址西側の上層より出土している。器形は底部より大きく開いて立ち上がる。底部は切り離した後、回転へら削りで全面に整形され、体部下端にも同様に回転へら削り。外面はナデにより整形されているが、内面は黒色で全面的磨きにより調整される。

8は土師器の甕である。住居址の中央部上層より散乱して出土している。器形は底部より内彎気味に立ち上がり、胴上位で最大径をもつ。口縁部は頸部より外反し、口唇部で稜をもって屈曲し直立する。口縁部内外面がナデにより整形され、胴部は上位が縦位のへら削り、中位で横位のへら削り、下位では斜方向にへら削り整形される。胴部の器厚は極めて薄く器厚調整される。

9は土師器の甕である。住居址中央の上層よりまとめて出土している。器形は胴部上位に最大径をもち、頸部で直立する。口縁部は大きく外反し、口唇部で屈曲し直立する。胴部上位は斜方向のへら削りにより整形され、同時に器厚調整もされる。口縁部内外面ともにナデにより整形。

10は土師器の甕あるいは甗の胴上部である。カマド内及び住居址中央より出土している。胴部はゆるやかに内彎して立ち上がり、口縁部で屈曲し外反する。口唇部はわずかに直立。口縁部は



第14图 第2号住居址出土遺物 (1/3) 2

折り返しており、肉厚になる。ナデにより整形される。胴部はタタキにより整形。

11は須恵器の甕の底部である。住居址中央の床面直上より出土している。器形は平らな底部より直線的に開く。内面はナデによる整形が残り、胴部下位にへら削り、中位にはタタキによる整形がみられる。底部中央にへら等の工具により印が付けられているが、欠損のため不明。

### 3. 第1号溝状遺構（第15図・図版11）

本遺構は調査当初より確認されており、攪乱等の影響を相当受けているものの、比較的良好な状況で検出されている。1住及び2住より南側で確認されており、住居址よりも50～60cm程低い傾斜地、H-5、H-6、G-6、F-6、F-7、E-7、D-7、D-8グリッドに位置している。標高22mのラインに添うように直線的に延びている。

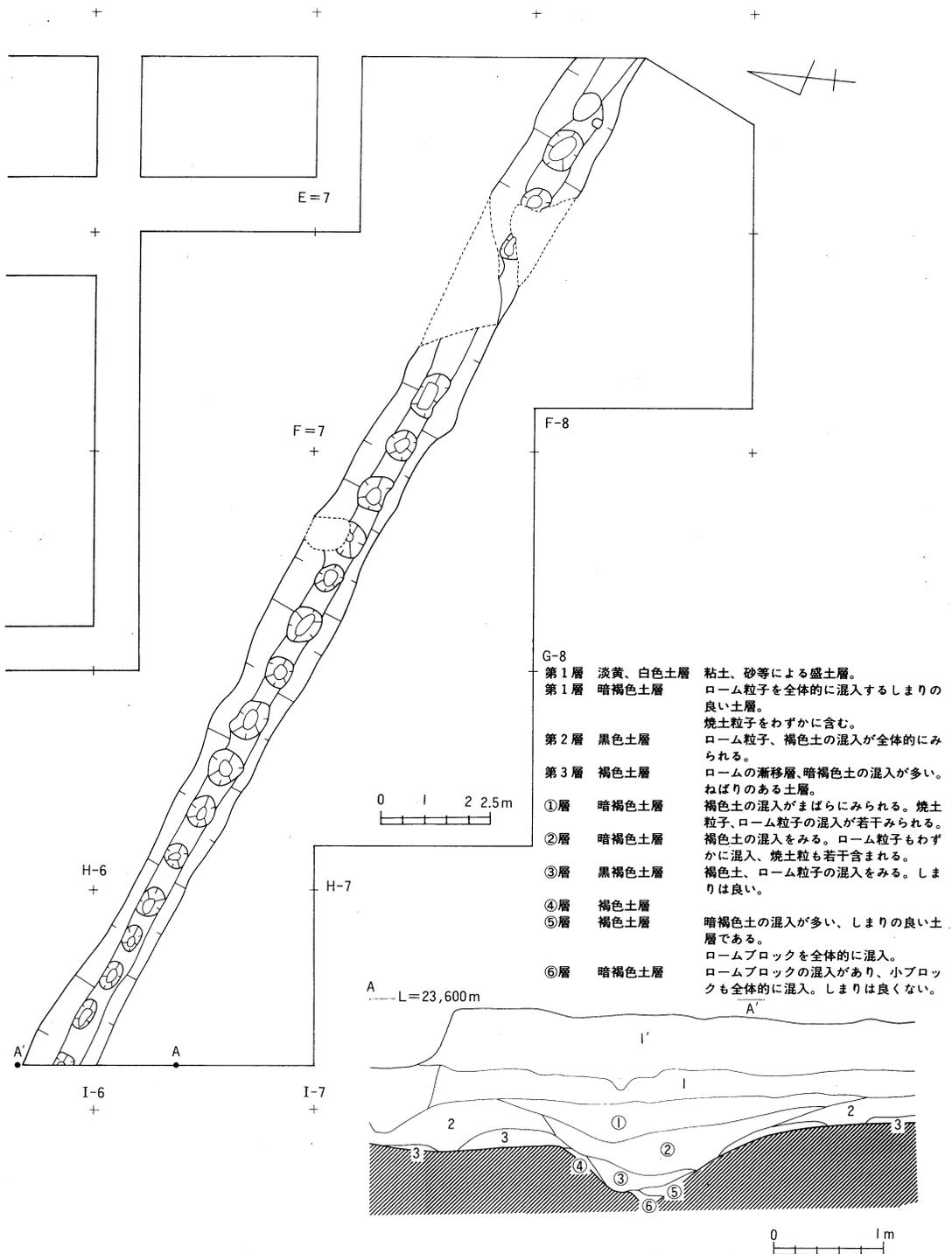
溝の中は平均1 m50cm、確認面から溝底部までの深さ40cmを計る。溝底部には約1 m間隔にピットが掘り込まれている。ピットは長軸で50～60cm、短軸で30～60cmとかなりばらつきがみられる。溝の底部からピットの底までの深さは25cm程である。

遺物の出土は溝の全体から出土しているが覆土上層よりのものが多く、土師器の小破片のものである。図化できる土器はない。

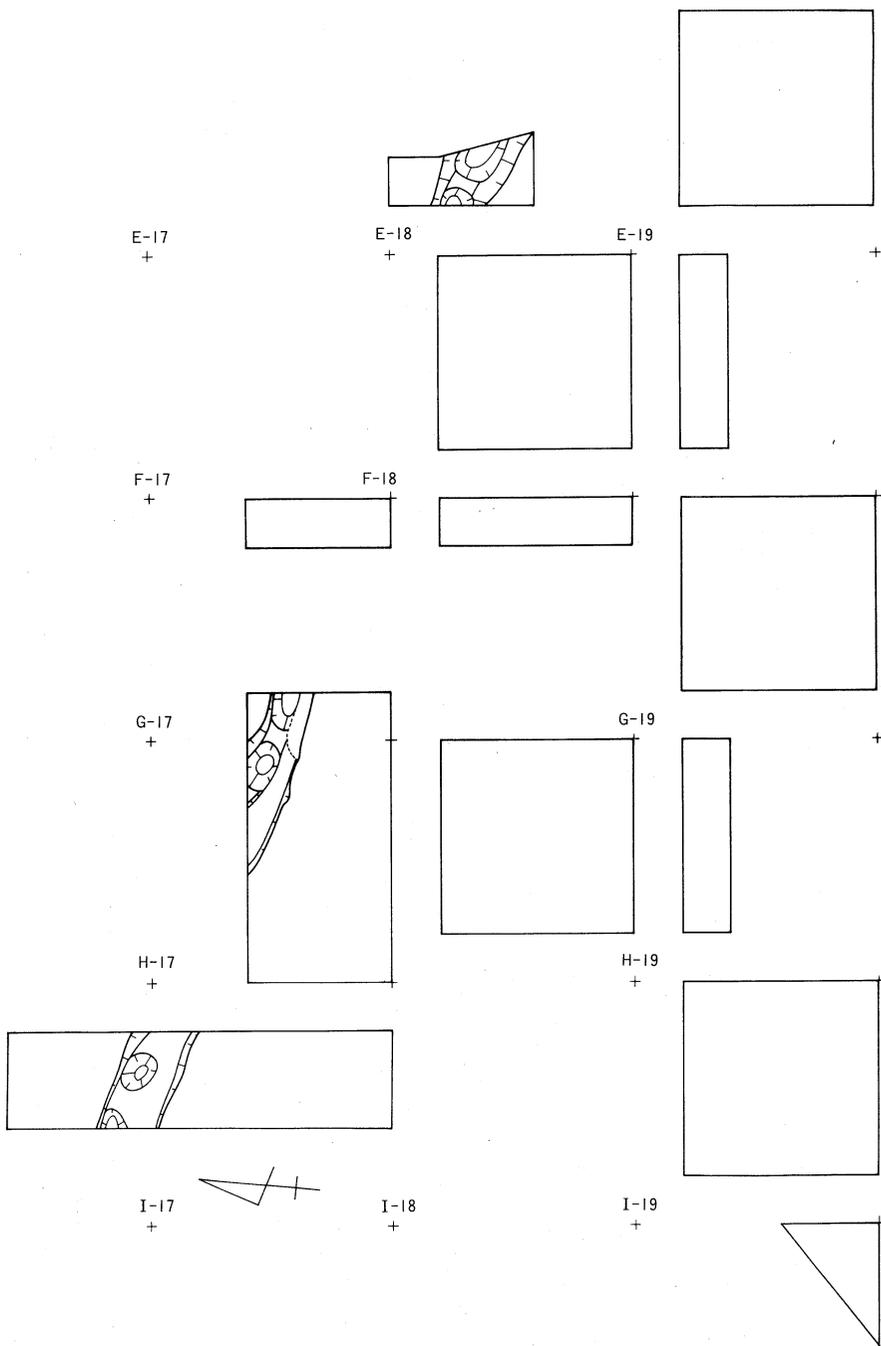
### 4. 第2号溝状遺構（第16図・図版12）

本遺構は唯一池の台側より検出された遺構である。前述の通り池の台側は特に攪乱がはげしく部分的にしか検出されないが、直線的に延びるものと推定される。H-16、G-17、D-18グリッドに位置している。標高は22m10cmである。

巾は1 m50cm程であり、確認面より溝底部まで40cm程を計る。溝底部には約1 m間隔で楕円形のピットが検出される。ピットの長軸で1 m、短軸で50～60cmを計る。深さは溝の底部からピットの底部まで20cm弱と浅い。基本的な構造は1号溝と同一のものであると考えられるが、本遺構は遺物の出土量が極めて少なく、また出土した土師器も小破片のため図化ができなかった。そのため両者の関連、性格を分析するには十分な資料を得ることができなかった。



第15図 第1号溝状遺構実測図 (1/150)



第16图 第2号溝状遺構実測図 (1/150)

0 1 2 2.5m

### 第三章 グリッド出土遺物

1は口線部片である。C-27グリッドより出土。胎工に石英等の砂粒を混入、内外面ともに貝から条痕。口唇部には貝から腹縁による圧痕がみられる。

2、3は胴部片である。H-4グリッドより出土。内外面ともに条痕文。

グリッド出土の遺物は遺構等の上面以外は多くは出土していない。特に縄文時代のものは極めて少なく図化したもの以外はほとんどみられない。また、土師器及び須恵器については白旛前側のみで出土しており、遺構の集中と関連する。以下図化土器について説明する。

4は土師器の杯である。G-7グリッドより出土。器形は大きく開いて、口唇部でやや外反する。整形は内外面ともにナデがみられる。体部中央に「羊」のように読める墨書がみられるが、正確には判読不能。

5は土師器の杯である。I-3グリッドより出土。器形は底部よりやや内彎気味に立さがる。底部は全面回転ヘラ削り、体部下端も同様。内外面ともナデ整形される。

6は土師器の杯である。表採である。器形は底部より大きく内彎気味に開く。底部は回転ヘラ削りされるが、全面であるが不明。体部下端にもみられる。体部には墨書の一部がみられるが判読不能。

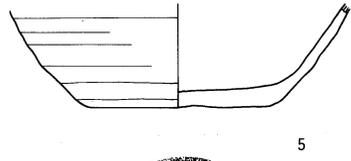
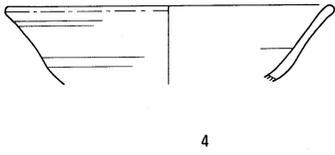
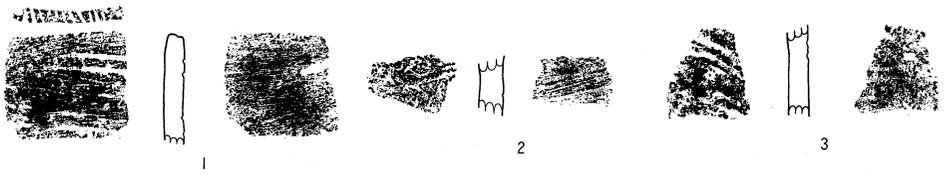
7は土師器の杯の底部である。H-7グリッド及第1号溝より出土。器形は大きな底部より、大きく開く。底部全面及び体部下端に回転ヘラ削りがみられる。内面黒色。

8は土師器の杯の底部である。I-7グリッドより出土。器形は底部より内彎気味に立ち上がる。底部は切り離し後、手持ヘラ削り、体部下端も同様。内面黒色であり、磨きが全面にみられる。

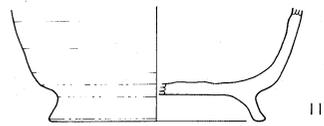
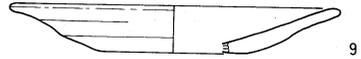
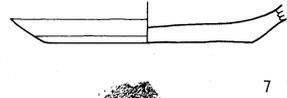
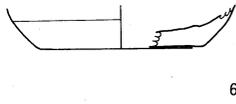
9は土師器の皿である。H-5、6、I-5グリッドより出土。底部は不鮮明であるが、外反して大きく開く、外面はナデ整形、内面は全面磨きがみられる。底部には高台部の貼り付けが推測される。

10は土師器の高台部である。G-7グリッドより出土。体部下端に高台部の貼り付けをおこなう。

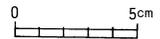
11は須恵器の高台付塊である。G-7グリッド、旧表土層中の出土である。器形は底部より内彎して立ち上がる。高台部は底部に貼り付けている。底部には回転ヘラ削りの痕跡が残り、高台部貼り付け後外面をナデより整形。



羊



第17図 グリッド出土遺物



## 第IV章 まとめ

今回発掘調査を実施した地域は、池の台遺跡として八千代市遺跡調査会により、昭和54年、57年度の二度にわたり調査が行なわれた区域と白幡前遺跡として財団法人千葉県文化財センターにより、昭和56、57年度にかけて調査が行なわれた萱田土地区画整理区域との間に位置し、両遺跡の関係を明らかにする資料の一端が得られるものと考えられた。しかし、前述のように調査区域内は住宅地や荒地であったため多くの攪乱を受けており、十分な調査成果を得られなかった。地形的には調査区域中央に延びる谷津により、形状的な両遺跡の区分も可能であると考えられるが、内実の検討には今後の総合的な研究にまたねばならないだろう。

調査区域内から遺構として、住居址2軒、溝状遺構2条が検出されている。住居址は出土遺物等により平安時代と考えられるが、溝状遺構については出土遺物が極端に少なく、時期判定は困難である。住居址の特徴は1・2号住居址ともに、北西方向に主軸をもち、3m大の小形の規模であり、北西壁中央にカマドが付設される。また、内部施設として周溝はカマドの付設される北西壁を除く壁直下に周くっている。さらに支柱穴等のピットを検出されていない。このような同じ構造をもった住居址であるが、2号住居址をさらに特徴付けるものとして、北西壁面でみられる粘土の貼り付があり、1号住居址ではみられないものであった。しかし、これは県文化財センターにおいて調査された白幡前遺跡で2軒ほど同様の例がみられる。(注1)

溝状遺構は中央の谷津を狭むように両側から検出されている。1号溝、2号溝ともに構造的には共通点がみられる。浅い溝の底部に1m程の間隔で浅い皿状のピットをもつ。これらは柵列との推定も可能である。しかし、これらが意味するところについては、より多くの資料の増加をまちたい。

遺物の出土量は住居址内の遺物を含めてみても多くはなく、特に縄文時代のものは極めて少ない。凶化された数点がまばらに出土するのみである。2度実施された池の台遺跡の調査(注2)では中期阿玉台期の遺物の出土例をみるが、今回は全くみられない。大半の遺物は土師器であるが住居址内出土以外に完全な状態での出土はみられない。これは攪乱等の影響も十分に考慮されねばならないだろう。また、出土した遺物の中には墨書された土師器の杯も若干みられるが、部分的な破片でもあり判読不能であった。

注1 「八千代市萱田・白幡前遺跡発掘調査現地説明会資料」1982 千葉県文化財センター

注2 「池の台遺跡」1979 八千代市遺跡調査会

池の台遺跡の昭和57年度の調査資料は現在整理中である。

# 圖 版



遺跡近景（北側）

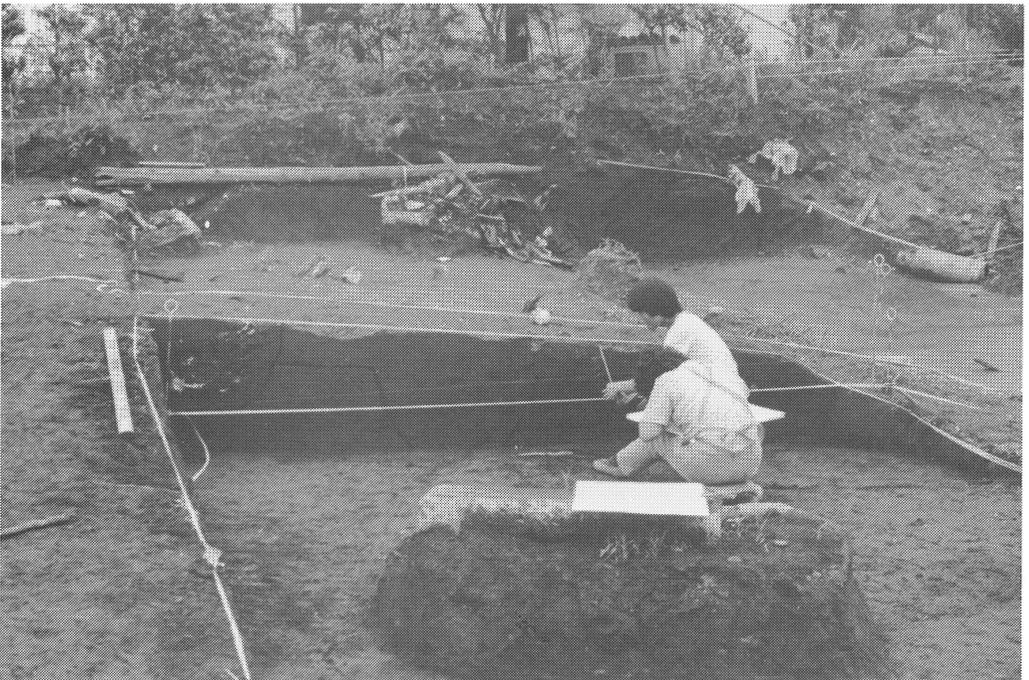


遺跡近景（南側）

図  
版  
2



発掘風景



実測風景



第 1 号住居址



第 1 号住居址土層

図  
版  
4



第1号住居址遺物出土状況



第1号住居址遺物出土状況

図  
版  
5



1



2



3



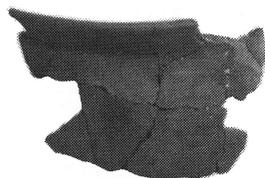
4



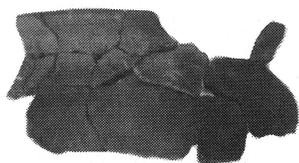
5



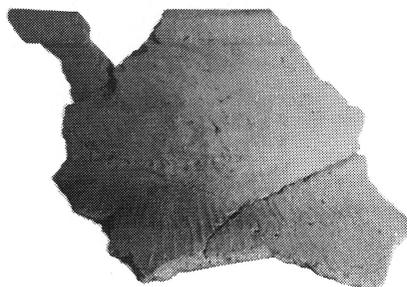
6



7



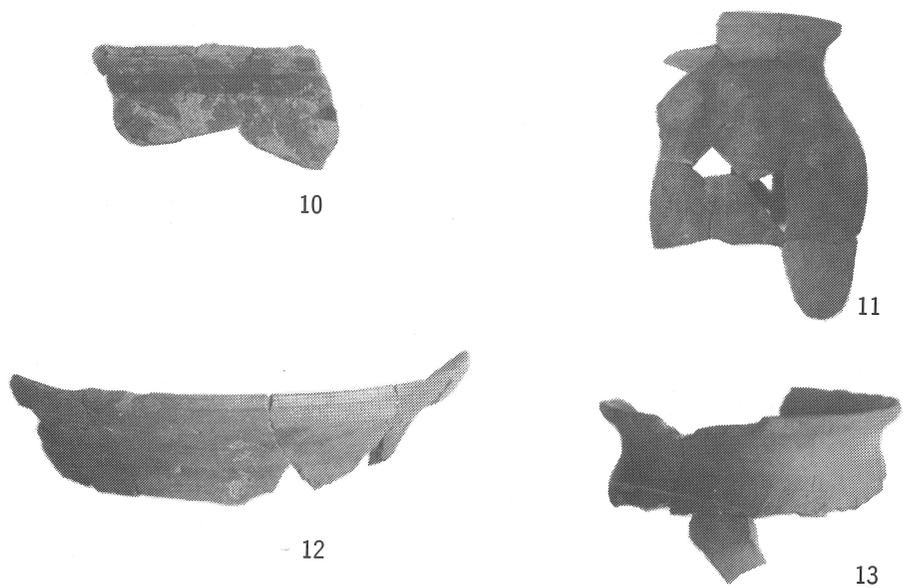
8



9

第1号住居址遺物(1)

図  
版  
6



第1号住居址遺物(2)



第1号住居址カマド



第2号住居址



第2号住居址土層

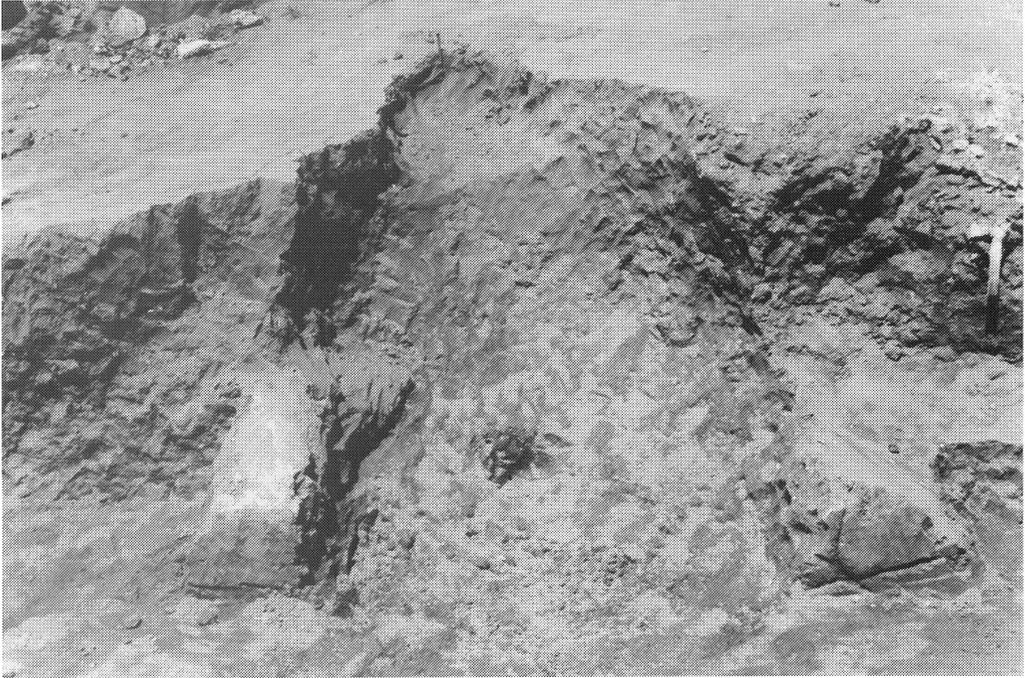
图  
版  
8



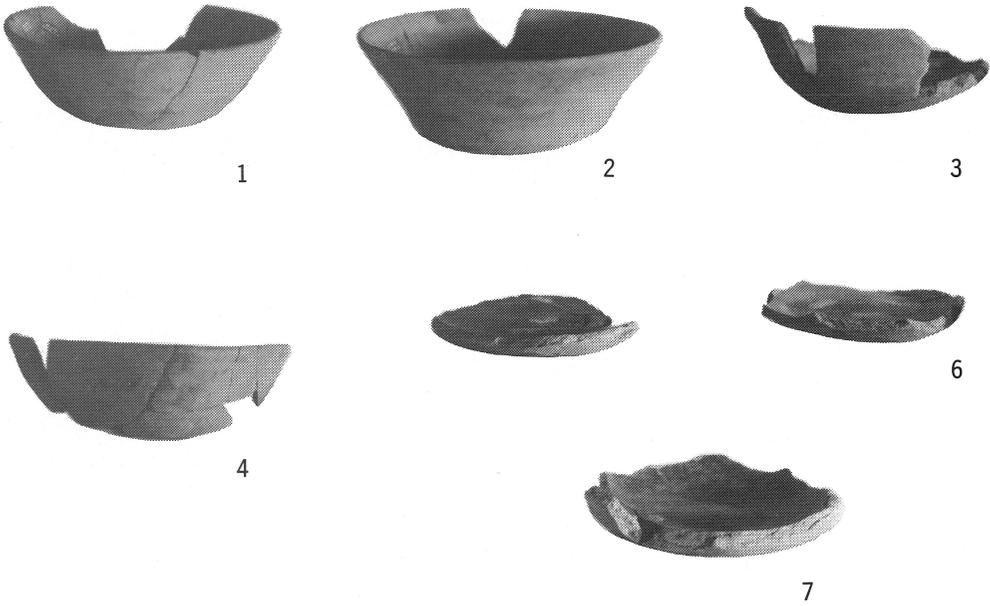
第 2 号住居址遺物出土状況



第 2 号住居址遺物出土状況

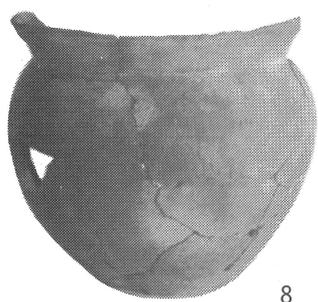


第2号住居址カマド

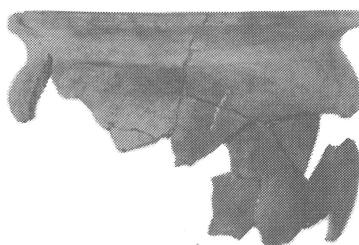


第2号住居址遺物(1)

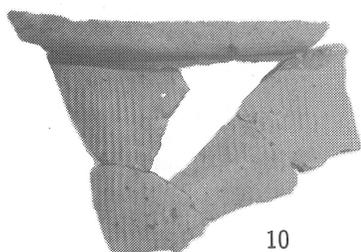
図  
版  
10



8



9



10

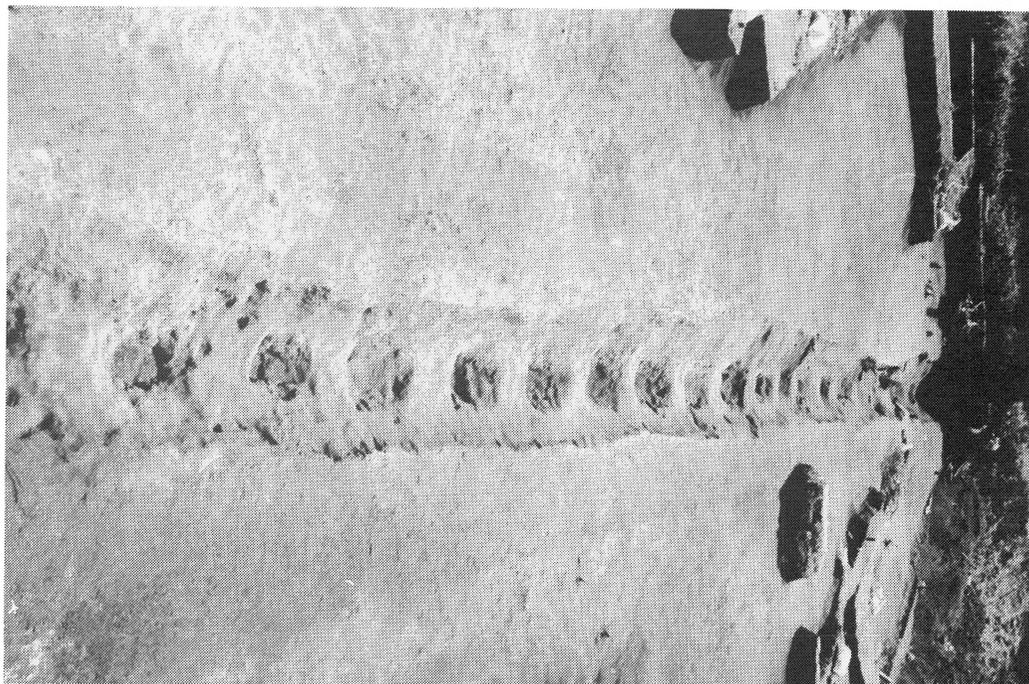


11

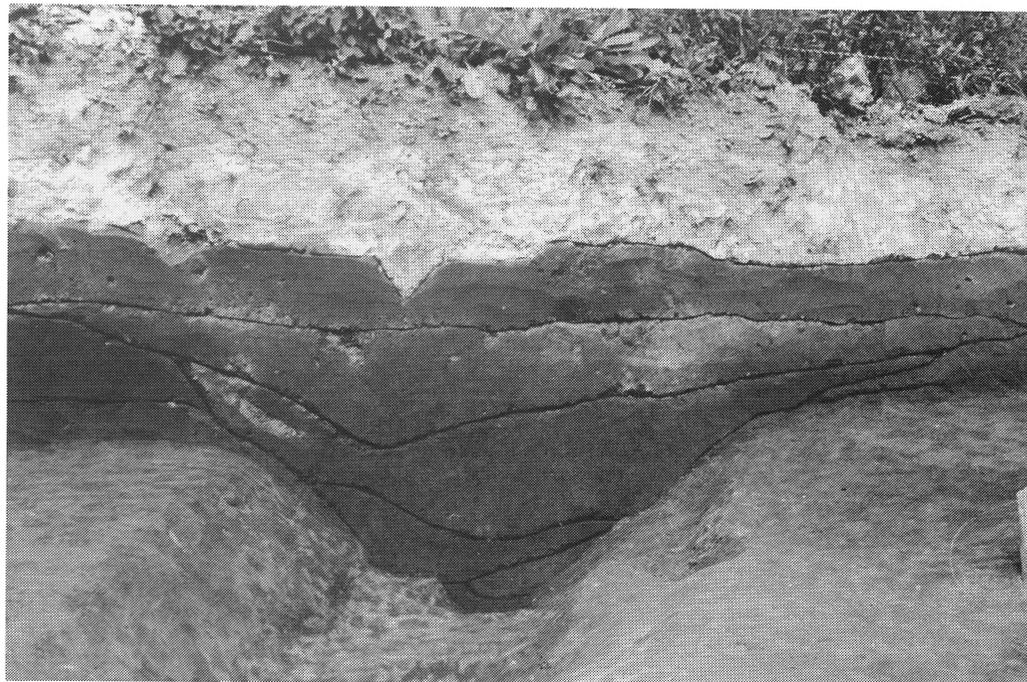
第2号住居址遺物(2)



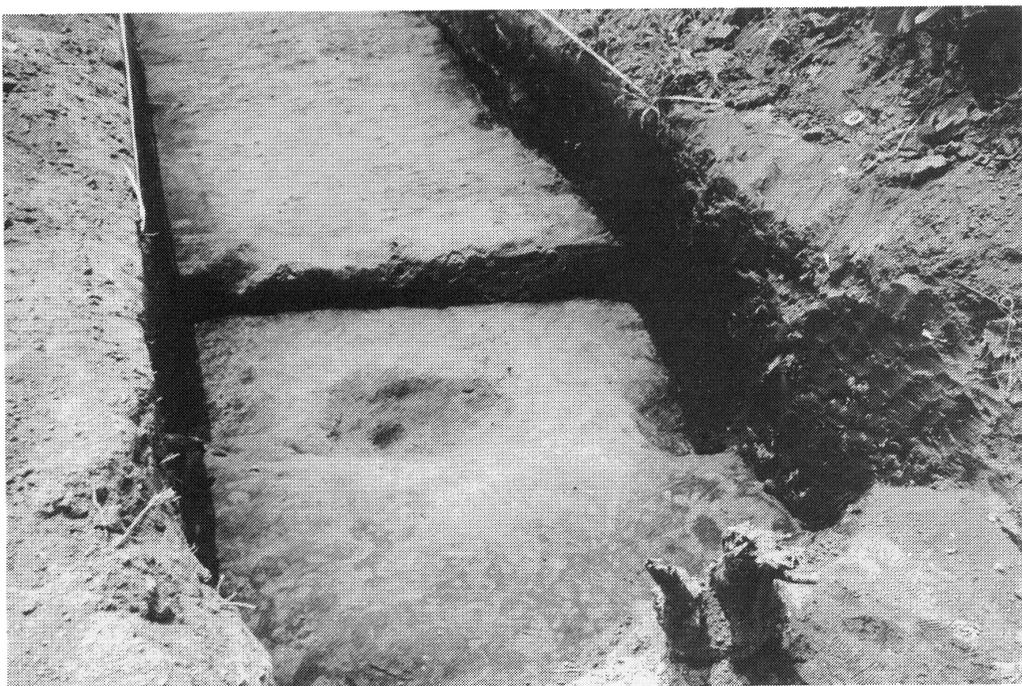
第1号溝状遺構発掘風景



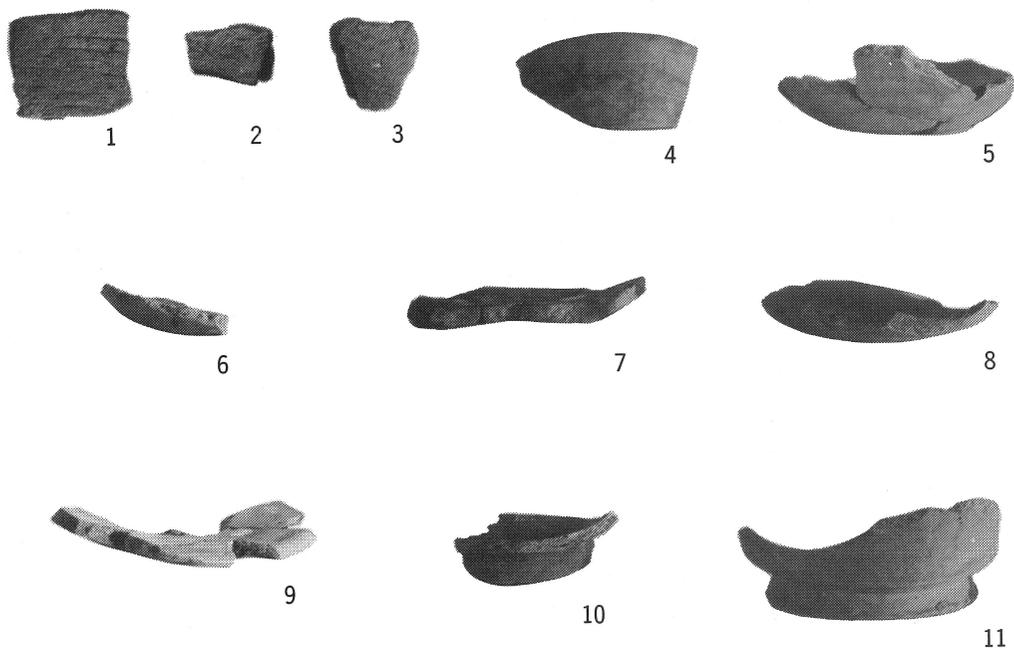
第1号溝状遺構



第1号溝状遺構土層



第2号溝状遺構



グリッド出土遺物

## 千葉県八千代市池の台遺跡

—都市計画道路3・3・7号線  
造成工事に先行する緊急調査—

印刷日 1986年3月10日

発行日 1986年3月20日

発行 八千代市教育委員会  
八千代市都市部都市計画課

印刷 (株)シーピーアール